

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	(おおつか げん)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	早稲田大学人間科学研究科修士課程一年
発表年月 または事業開催年月	2024 年 11 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本学校メンタルヘルス学会 第 28 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	大塚元, 森實駿介, 桂川泰典
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	精神的健康に対するレジリエンスと強み (strengths) の関連 — 交互作用を考慮した階層的重回帰分析による検討 —
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>本邦のレジリエンスや強みの活用介入は 1 次予防的な取り組みとして教育現場を中心に注目されている。こうした概念は精神的健康との関連が指摘される一方で、効果的な介入手法の提唱には至っていない。そこで精神的健康に与える上記概念の交互作用効果および関連の検討を目的とする。</p> <p>調査対象者は青年期の大学生、大学院生 (18-24 歳) 181 名を対象に質問紙調査を実施した。調査時期は 2023 年 7 月中旬から 12 月上旬にかけて実施された。測度はデモグラフィックデータ, 日本語版 SUS (Strength Use Scale) 尺度 (高橋・森本, 2015), ポジティブ側面への積極的注目 (AFP: Active Focusing on Positivity) 尺度 (高橋, 2016), 二次元レジリエンス要因 (Bidimensional Resilience Scale: BRS) 尺度 (平野, 2010)。日本語版 Student's Life Satisfaction Scale (SLSS) 尺度 (吉武, 2010), 日本版 BDI-II 尺度 (Beck, 1996/2003) である。本研究は早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の審査, 承認を得て行われた (申請番号:2023-74)。</p> <p>生活満足度を従属変数として階層的重回帰分析を行った。獲得的レジリエンスと SUS を組み合わせた交互作用項を独立変数として投入し, 交互作用の検討を行った。その結果, 交互作用に有意傾向が認められた ($\beta = .124, p < .062$)。この時生活満足度に最も影響していた要因は S_AFP であった ($\beta = .282, p < .001$)。単純傾斜分析により生活満足度に対する影響を検討した結果, 獲得的レジリエンスが高い場合のみ有意であり, SUS の低群よりも高群の方が生活満足度得点の変化量が大きかった。BDI-II を従属変数として階層的重回帰分析を行った。BDI-II に最も影響していたのは獲得的レジリエンスと S_AFP であった (獲得的レジリエンス: $\beta = -.223, p = .005$; S_AFP: $\beta = -.223, p = .011$)。一方で SUS は有意でなくなった。また交互作用は認められなかった。</p> <p>上記を踏まえレジリエンスや強みを包括した介入を実施する際には, 以下の順序が効果的であると想定された。まず抑うつに直接関連がない強みの活用感よりも先に, 獲得的レジリエンスを高めるアプローチを実施する。次に獲得的レジリエンスと交互作用を示す強みの活用感を高めるアプローチを実施する。最後に精神的健康へ最も効果が見込まれる自己の強み注目を高めるアプローチを実施する。今後は獲得的レジリエンス, 強みの活用感, 自己の強みへの注目の順序で介入を検討することで, 抑うつリスクの低減を図りつつ, 生活満足度の向上を安定して目指すことができると考えられる。</p>	

※無断転載禁止